広島経済大学研究論集
第38巻第4号　2016年3月

北琉球奄美方言における有生性階層
――奄美大島浦方言と喜界島上嘉鉄方言・小野津方言を例に――

重野　裕美*・白田　理人**

要　旨

通言語的に名詞句が有生性階層と呼ばれる階層をなし，この階層に占める位置に応じて形態的・統語的に異なるふるまいを示すことが指摘されている。

- 有生性階層（角田 2009: 41）
  代名詞（1人称／2人称／3人称）／名詞（親族名詞／固有名詞／人間名詞／動物名詞／無生物名詞（自然の力の名詞／抽象名詞／地名））

本稿が対象とする奄美大島浦方言と喜界島上嘉鉄方言・小野津方言では，複数標識・主格標識・名詞修飾（所有）標示において名詞句の種類に応じた相違がみられる。本稿は，この相違を分析し，以下の階層を提示する。

- 奄美方言の有生性階層（括弧内は方言・現象によって区別がないことを示す）
  人称代名詞（／）疑問代名詞（／）指示代名詞／呼称となる名詞（／）固有名詞／親族名詞（呼称以外）（／）その他の名詞

また，以上の階層に加え複数名詞が単数名詞よりも上位の階層に位置する現象がみられた。この点と，呼称となるか否かが名詞句のふるまいを左右する点が，奄美方言の有生性階層の特徴といえる。

1.　は　じ　め　に

奄美大島方言は，鹿児島県大島郡の奄美大島で話されている。喜界島方言は，同じ大島郡の喜界島で話されている。両方言とも琉球語[1]に属する方言である。

琉球語は鹿児島県の奄美諸島から沖縄県にわたって伝統的に話されている言語である。ほとんどの地域で日本語（標準語）への言語推移が進行しており，若い世代にはわずかな語彙や文法しか継承されていない。伝統方言話者の高齢化が進み，地域コミュニティが徐々に崩壊していく中，詳細かつ総合的な記述研究を行うには今が最後の機会となっており，資料収集・調査が喫緊の課題である。

本稿は，奄美大島の浦集落，喜界島の上嘉鉄集落及び小野津集落において話されている方言（以下それぞれを浦方言，上嘉鉄方言，小野津方言と呼ぶ）の有生性階層とその地域差について筆者の臨地調査[2]に基づき記述する。

図1[3]に浦集落，上嘉鉄集落，小野津集落の位置を示す。2015年12月末現在，浦集落の人口は578人[4]である。2015年11月末現在，上嘉鉄集落の人口は399人，小野津集落の人口は385人である[5]。上記のように伝統方言は若い世代に継承されていないことから，集落内の方言話者数はこれより少なく見積もられる。

*　広島経済大学経済学部准教授
**　日本学術振興会特別研究員（PD）／琉球大学人文社会科学研究科

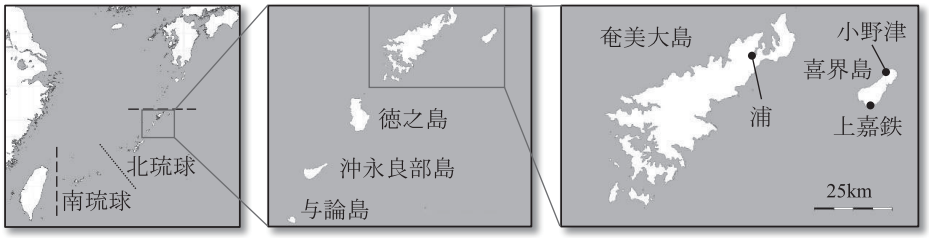

図１　浦集落・小野津集落・上嘉鉄集落の位置

2.　背 景 と 目 的

通言語的に名詞句が有生性階層と呼ばれる階層をなし，この階層に占める位置に応じて形態的・統語的に異なるふるまいを示すことが指摘されている（Silverstein 1976，Corbett 2000，角田 2009）。以下，図２に Silverstein（1976）の名詞句階層を基に角田（2009）が修正した階層を示す。図中の左方が階層上位，右方が下位である。

Silverstein（1976）は有生性階層を「動作主として機能しやすい度合」の階層として提示し，分裂能格と呼ばれる現象における名詞句のふるまいの記述に用いたが，その後（琉球語を含め）さまざまな類型の言語の種々の現象に同様の階層が適合することが分かった。琉球語においては，複数標示及び主格／属格助詞[6] の分布が有生性階層に従うことが Pellard（2010），Shimoji（2011），新永（2013），Niinaga（2014），徳永（2014）で示された。

南琉球宮古諸方言のうち Pellard（2010），Shimoji（2011）はそれぞれ大神方言及び伊良部方言を対象として主格／属格標識，複数標識の分布を表１[7] のように階層上にまとめて示している。ここでは，代名詞，呼称名詞，ヒト名詞，有生名詞，無生名詞が名詞句の階層の区分となっている。

北琉球奄美方言のうち新永（2013），Niinaga（2014）では，湯湾方言を対象として複数標識，名詞句の修飾部に用いる形式及び主格標識の分布について次頁表２のように階層上にまとめて示している[8]。ここでは，人称代名詞，人を指す疑問詞，人を指す指示代名詞，呼称名詞，有生名詞，無生名詞の区分に従って分布している。

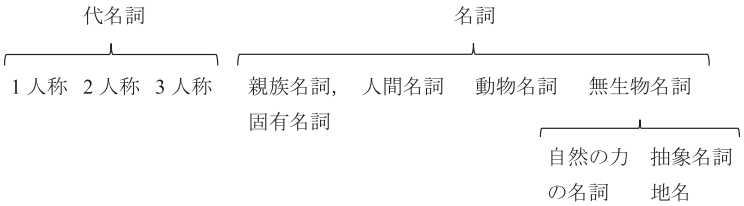

図２　シルバースティーンの名詞句階層（角田 2009: 41）

表１　宮古方言の名詞句階層

方言	標識	代名詞	呼称名詞	ヒト名詞	有生名詞	無生名詞
大神島	主格／属格	=ka		=nu		
	複数	-ta		-nummi		なし
伊良部島	主格／属格	=ga	=ga/=nu	=nu		
	複数	特殊形式	-ta	-mmi	分析的形式	なし

表 2　奄美大島湯湾方言の名詞句階層

標示		１人称／２人称代名詞	疑問代名詞（ヒト）	指示代名詞（ヒト）	呼称名詞	有生／無生名詞
複数		-kya	-taa			=nkja
名詞修飾	単数	連体形		=ga	並置（無標）	=nu
	複数	連体形	並置（無標）			=nu
主格		=ga	N/A	=ga		=nu

また，名詞句の修飾部に用いる形式では単複の違いが名詞句のふるまいを左右している。

以上の琉球諸語の先行研究において示されている名詞句の階層は，図２の名詞句の有生性階層に沿ったものであるが，２点特徴をあげることができる。１点目はヒトを指す名詞のうち呼称となるかどうかが名詞句のふるまいに影響を及ぼす点である。２点目は表２に示されているように，単数か複数かの違いも階層上の区分に影響を及ぼす点である。

本稿では，琉球諸語の有生性階層の概要と地域差の提示に向け，これまで有生性階層の観点からは十分に記述されていなかった浦方言／上嘉鉄方言／小野津方言を対象に，複数標示，主格標示及び名詞修飾標示の記述・分析を通して各方言の有生性階層の提示と方言間の対照を行う。

以下，３節から５節では各方言において複数標識・主格標識・名詞修飾標示にみられる階層について述べる。３節で浦方言，４節で上嘉鉄方言，５節で小野津方言を扱う。小野津方言では階層上位の名詞で末尾の長母音が短母音との交替を示す。５節ではこの交替についても扱う。６節はまとめと課題である。

3.　浦　　方　　言

本節では浦方言のデータと分析を複数標識，主格標識，名詞修飾の順に示す。

3.1　複数標識にみられる階層

複数標識と名詞句階層との関連について述べる。浦方言の複数標識は，-ta，-kya，=nkya の３つである。-ta，-kya は名詞にしか後接しないため接辞と分析する。一方，=nkya は曖昧・例示の意味で以下の例のように名詞だけではなく動詞や格助詞にも後接するため接語として扱う。なお，本稿では個々の語形における意味的な違いによらず以上３つの形式の分布を分析し，曖昧・例示が意味する語形も考察に含める。

(1)　nazë=cchi=nkya　i-jari=nkya
名瀬=方向=曖昧　行く-並列=曖昧
sh-u-tat=too.
する-習慣-過去=断定
「名瀬とかに行ったりとかしていたよ。」

通言語的に複数には累加複数（additive plural），近似複数（associative plural）がある。累加複数とは，同質のものを加えてできたグループを指す。言い換えれば，複数形が表すグループのうち，どの一つのメンバーをとっても語幹名詞の表す属性をもつ（例：students「学生たち（＝学生の集合）」）。一方，近似複数は，代表となるメンバーを指す名詞に複数接辞がついてグループを指す。この場合は必ずしも個々のメンバーを語幹名詞で指示できない（例：ヒロミたち（＝ヒロミと友達））。複数標識 -ta，-kya，=nkya は，累加複数・近似複数のどちらも表しうる。さらに，=nkya については（特にモノ名詞および上例のように名詞以外に後接した場合には）曖昧・例示の意味を表す。

表３　浦方言のヒトを表す代名詞

分類＼数		単数	複数（２人以上）	
			双数	複数（３人以上）
人称代名詞	１人称	wan	wa-ttari	wa-kya
	２人称（非敬称）	y'aa	y'a-ttari	y'a-kya
	２人称（敬称）	nan	na-ttari	na-kya
指示詞代名詞		arï / kurï / urï	at-ta / kut-ta / ut-ta	
疑問代名詞（誰）		taru	tat-ta	

以下，名詞に後接する複数標識の分布について示す。まず，ヒトを表す代名詞（人称代名詞，指示代名詞，疑問代名詞）の語形を表３[9] に示す。

１人称と２人称の複数には -kya が，指示代名詞と疑問代名詞の複数には -ta が現れる。なお，双数は１人称のみが義務的で，２人称・３人称の双数は義務的ではなく，語幹＋ -kya の形も用いうる。

次に，親族呼称，固有名詞，その他（親族名詞／ヒト名詞／職業呼称／モノ代名詞／有生名詞／無生名詞）に複数標識が後接した語例を以下に示す。

(2)　親族呼称
c'han-ta
「お父さんたち」
anma=nkya
「おばあちゃんたち」

(3)　固有名詞
takashi-ta
「タカシたち」

(4)　その他
uya=nkya
「親たち」
ututu=nkya
「弟たち」
an c'hu=nkya
「あの人たち」
du=nkya
「自分たち」
sensee-ta ～ sense=nkya[10]
「先生たち」
ishosha=nkya
「漁師たち」
arï=nkya
「あれなんか」
ushi=nkya
「牛たち」
gan=kya
（～ gan=nunkya[11]）
「蟹なんか」
k'washi=nkya
「菓子など」
ton=kya
（～ ton=nunkya）
「芋なんか」

大まかには親族呼称，職業呼称，固有名詞など呼びかけに使える名詞には，ヒトを表す指示代名詞，疑問代名詞と同じく -ta が用いられる。それ以外の名詞には，=nkya が用いられる。sensee「先生」は教師という属性を表しうる名詞であるが，呼称としても用いることができる。この点で sensee に -ta が使われることは説明できる。以下，このような性質から sensee「先

生」は職業呼称として分類する。また，親族呼称のうち anma「おばあさん」は親族呼称としてだけではなく，年老いた女性を表す名詞としても使える。そのため，-ta だけではなく =nkya も用いられると考える[12)]。なお，指示代名詞に関しては，ヒトを指すときは -ta が，モノを指すときには =nkya が用いられる。以上をまとめると，表 4 のようになる。

表 4　浦方言の複数標識

人称代名詞	-kya
ヒト疑問代名詞	-ta
ヒト指示代名詞	-ta
親族呼称	-ta（~ =nkya）
職業呼称	-ta（~ =nkya）
固有名詞	-ta
その他	=nkya

3.2　主格標識にみられる階層

浦方言の主格標識には =ga（または =ka），=nu がみられる。以下，主格標識の分布を名詞句の有生性階層の観点から分析する。人称代名詞，ヒト疑問代名詞，ヒト指示代名詞，親族呼称，職業呼称，固有名詞，親族名詞・ヒト名詞，その他の順に語例を示す。

なお，名詞述語及び形容詞述語は名詞句階層の低い層でも ga が現れる場合がある[13)] ため，今回の文例からは省いている。これは情報構造との関連が考えられるが詳しくは別稿に譲る。

(5)　人称代名詞
wa=ga　kac-chat=too.
私=主格　勝つ-過去=断定
「私が勝ったよ」

y'a=ga　kac-chii?
お前=主格　勝つ-過去
「お前が勝ったの？」

(6)　ヒト疑問代名詞
tak=ka　kac-chi=yoo?
誰=主格　勝つ-過去=疑問詞疑問
「誰が勝ったの？」

(7)　ヒト指示代名詞
ak=ka
あれ=主格
kac-chan=chi=naa?
勝つ-過去=引用=真偽疑問
「あいつが勝ったって？」

(8)　親族呼称
c'han=ga　ko-tat=too.
お父さん=主格　買う-過去=断定
「お父さんが買ったよ」

(9)　職業呼称
sensee-ta=ga
先生-複数=主格
ko-isho-tan=kai?
買う-尊敬-過去=疑問
「先生たちが買いなさったか？」

(10)　固有名詞
takashi=ga　kac-chan=chi=doo.
タカシ=主格　勝つ-過去=引用=断定
「タカシが勝ったってよ」

(11)　親族名詞／ヒト名詞
ututu=nu　kac-chat=too.
弟=主格　勝つ-過去=断定
「弟が勝ったよ」

ututu=nu　ko-tat=too.
弟=主格　買う-過去=断定
「弟が買ったよ」

kun　c'hu=nu　mëë
この　人=主格　前
hana-shu-ta-n=doo.
話す-継続-過去-名詞化＝断定
「この人が前話していたんだよ」

an　c'hu=nu　ko-tat=too.
あの　人=主格　買う-過去=断定
「あの人が買ったよ」

an　ishosha=nu　kac-chat=too.
あの　漁師=主格　勝つ-過去=断定
「あの漁師が勝ったよ」

（12）その他
mushi=nu　utï-tat=too.
虫=主格　落ちる-過去=断定
「虫が落ちたよ」

ak=ka　utï-tu-tï=kai?
あれ=主格　落ちる-継続-過去=疑問
「あれが落ちていたか？」
（cf. arï「あれ」）

nuu=nu
何=主格
utï-tu-tï=yoo?
落ちる-継続-過去=疑問詞疑問
「何が落ちたのか？」

dïk=ka
どれ=主格
utï-tu-tï=yoo?
落ちる-継続-過去=疑問詞疑問
「どれが落ちていたか？」
（cf. dïru「どれ」）

amï=nu　hur-yun.
雨=主格　降る-非過去
「雨が降る」

以上のように，大まかにはヒトを表わす代名詞および呼称には =ga が，それ以外には =nu が用いられる。ただし，ヒトを表わす代名詞のうち，rV を末尾に持つものは =ka が現れる（(6) 参照）。また，モノ代名詞も rV を末尾に持つものには =ka が現れる（(12) のうち，「あれ」「どれ」の例を参照）。=ka の分布は，代名詞という名詞の種類と，rV を末尾に持つという音韻的な条件の両方で分布が決まっているものと考える[14)]。以上をまとめると，表５のようになる。

表５　浦方言の主格標示

人称代名詞	=ga
ヒト疑問代名詞	=ga
ヒト指示代名詞	=ka
親族呼称	=ga
職業呼称	=ga
固有名詞	=ga
親族名詞／ヒト名詞	=nu
モノ代名詞 （末尾音が rV：指示詞と「どれ」）	=ka
その他	=nu

3.3　名詞修飾標示にみられる階層

浦方言の名詞修飾標示について述べる。名詞修飾には，被修飾部に修飾部を前置するだけで修飾関係が成立するものと，前置された修飾部に属格助詞 =nu（または =ka）を後接させて標示するものがある。以下，名詞修飾標示の分布を名詞句の有生性階層の観点から分析する。

名詞修飾標示には修飾部名詞の単複も一部影響するため，人称代名詞単数，人称代名詞複数（-kya），ヒト疑問代名詞／ヒト指示代名詞単数，ヒト疑問代名詞／ヒト指示代名詞複数（-ta），

親族呼称／固有名詞単数，親族呼称／固有名詞複数（-ta），親族名詞／ヒト名詞単数，モノ指示代名詞単数，その他の順に示す。なお，職業呼称についてはデータが不十分であるため言及しない。

（13）人称代名詞単数

wan　tïï
私　手
「私（の）手」

y'aa　tïï
お前　手
「お前（の）手」

nan　tïï
あなた　手
「あなた（の）手」

（14）人称代名詞複数（-kya）

wa-kya　anma
私-複数　おばあさん
「私たち（の）おばあさん」

y'a-kya　tïï
お前-複数　手
「お前たち（の）手」

na-kya　tïï
あなた-複数　手
「あなたたち（の）手」

（15）ヒト疑問代名詞／ヒト指示代名詞単数

tak=ka　tïï
誰=属格　手
「誰の手」

ak=ka　tïï
あれ=属格　手
「あれの手」

（16）ヒト疑問代名詞／ヒト指示代名詞複数（-ta）

tat-ta　tïï
誰-複数　手
「誰たち（の）手」

at-ta　tïï
あれ-複数　手
「彼ら（の）手」

（17）親族呼称／固有名詞単数

c'han=nu　tïï
お父さん=属格　手
「お父さんの手」

takashi=nu　tïï
タカシ=属格　手
「タカシの手」

（18）親族呼称／固有名詞複数（-ta）

c'han-ta　tïï
お父さん-複数　手
「お父さんたち（の）手」

takashi-ta　tïï
タカシ-複数　手
「タカシたち（の）手」

（19）親族名詞・ヒト名詞単数

ututu=nu　tïï
弟=属格　手
「弟の手」

an　　c'hu=nu　tïï
あの　人=属格　手
「あの人の手」

(20)　モノ指示代名詞単数
kuk=ka　　naka
これ=属格　中
「これの中」

(21)　その他
ututu=nkya=nu　tïï
弟=複数=属格　手
「弟たちの手」

nuu=nu　hanashi
何=属格　話
「何の話」

m'a=nu　ashiato
馬=属格　足跡
「馬の足跡」

k'washi=nu　hako
菓子=属格　箱
「菓子の箱」

以上のデータに基づくと，浦方言の名詞修飾で無標となるのは人称代名詞（単複）およびヒト疑問代名詞・ヒト指示代名詞・親族呼称・固有名詞の -ta 複数形である。修飾部に属格 =ka が後接するのはヒト疑問代名詞・ヒト指示代名詞・モノ指示代名詞の単数である[15]。もう一つの属格 =nu が後接するのは，親族呼称・固有名詞・親族名詞・ヒト名詞の単数およびその他（=nkya 複数形／モノ疑問詞／有生名詞／無生名詞）となる。以上の分布をまとめると表６のようになる。

表６　浦方言の名詞修飾標示

人称代名詞単数	無標
人称代名詞複数（-kya）	無標
ヒト疑問代名詞・ヒト指示代名詞複数（-ta）	無標
親族呼称・固有名複数（-ta）	無標
ヒト疑問代名詞・ヒト指示代名詞単数	=ka
親族呼称単数	=nu
固有名詞単数	=nu
親族名詞・ヒト名詞	=nu
モノ指示代名詞	=ka
その他	=nu

4.　上 嘉 鉄 方 言

本節では上嘉鉄方言のデータと分析を複数標識，主格標識，名詞修飾の順に示す。

4.1　複数標識にみられる階層

上嘉鉄方言の複数標識には -(n)naa，-chaa，-taa，-nchaa，=ncha がある。=ncha は浦方言の =nkya と同様，名詞以外にも後接するため，本稿では接語として扱う（以下例参照）[16]。-(n)naa，-chaa，-taa，-nchaa，=ncha は，浦の -kya, -ta，=nkya 同様，累加複数，近似複数，曖昧例示を表す。本稿では個々の語形における意味的な違いによらず以上の形式の分布を分析し，曖昧・例示が意味する語形も考察に含める。

(22)　ahen=cha　y-i-n
そう=曖昧　言う-非過去-連体
mun=na!
もの=真偽疑問
「そんなこと言うもんか」

（23）takashi=nu　shima=kachi
タカシ=主格　島=方向格
sh-in=ten=cha
来る-非過去=引用=曖昧
y-oo-tan=doo.
言う-継続-過去=断定
「タカシが島に来るとか言っていたよ」

まずヒトを表す代名詞の語形を表7に示す[17]。括弧内は「私1人」「お前1人」のように「○○1人」を表す形式である。代名詞には複数接辞として -(n)naa/-chaa がみられる。1人称複数には聞き手を含まない除外と聞き手を含む包括との区別があり，前者には -(n)naa が，後者には -chaa が用いられる。以降の先取りになるが，-(n)naa は代名詞にしか用いられない。「自分」を表す duu は -(n)naa が後接するので，浦方言の場合（例（4）参照）と異なり代名詞に含めている。

以下，親族呼称，職業呼称，固有名詞，親族名詞，ヒト名詞，その他（有生名詞／モノ代名詞／無生名詞）の順に複数形の語例を示す。

（24）親族呼称[18]
ajii-taa
「おじいさんたち」
anmaa-taa
「お母さん／おばあさんたち」
okkan-taa
「お母さんたち」
yakkii-taa
「お兄さんたち」
boo-taa
「男たち」
bo-nkaa-taa
「男の子たち」（-nkaa は指小辞）
yakki-nkaa-taa
「次兄たち」
uttu+boo-taa
「弟たち」
marii-taa
「女たち」

（25）職業呼称
shinsee-taa
「先生たち」

表7　上嘉鉄方言のヒトを表す代名詞

<table>
<tr><th colspan="2">分類＼数</th><th>単数</th><th colspan="2">複数（2人以上）</th></tr>
<tr><th colspan="2"></th><th></th><th>双数</th><th>複数（3人以上）</th></tr>
<tr><td rowspan="4">人称代名詞</td><td>1人称（除外）</td><td rowspan="2">wan
（wa-cchuri）</td><td colspan="2">wa-nnaa</td></tr>
<tr><td>1人称（包括）</td><td>wa-ttari</td><td>wa(a)-chaa</td></tr>
<tr><td>2人称（非敬称）</td><td>da
（da-cchuri）</td><td>da-ttari</td><td>da-nnaa</td></tr>
<tr><td>2人称（敬称）</td><td>naami
（na-cchutooru）</td><td>na-ttatooru</td><td>naa-chaa</td></tr>
<tr><td colspan="2">指示詞代名詞</td><td>ari / hwuri / uri</td><td colspan="2">an-naa / hwun-naa / un-naa</td></tr>
<tr><td colspan="2">再帰代名詞</td><td>duu
（du-cchuri）</td><td colspan="2">duu-naa</td></tr>
<tr><td colspan="2">疑問代名詞（誰）</td><td>taru</td><td colspan="2">tan-naa</td></tr>
</table>

（26）　固有名詞
takashi-taa
「タカシたち」

（27）　親族名詞
uya-nchaa
「親たち」
uttu-nchaa
「下のきょうだいたち」

（28）　ヒト名詞
an chu-nchaa
「あの人たち」
yinŋa=ncha
「男たち」
meerabi=ncha
「若い女たち」
seekusa=ncha
「大工たち」
an mun=cha
「あいつら」

（29）　その他
inŋa=ncha
「犬たち」
guru=ncha
「猫たち」
ari=ncha
「あれなど」
se=ncha
「酒なんか」
hatana-nka=ncha
「小さいナイフなんか」
sa=ncha
「茶なんか」

以上のデータから，代名詞及び呼称に用いられる名詞には -taa が，呼称には使えない親族名詞とヒト名詞のうち chu「人」には -nchaa が，それ以外には =ncha が用いられる。以上をまとめると，表８のようになる。

表８　上嘉鉄方言の複数標識

人称代名詞／再帰代名詞	-(n)naa / -chaa
ヒト疑問代名詞	-nnaa
ヒト指示代名詞	-nnaa
親族呼称	-taa
職業呼称	-taa
固有名詞	-taa
親族名詞	-nchaa
その他	=ncha（chu「人」のみ -nchaa）

複数標識 -taa と -nchaa/=ncha の区別は浦方言と同じような分布となるが，浦方言との相違点として -nchaa と =ncha という二つの形がある点が指摘できる。喜界島方言では，複合名詞の後部要素の末尾が長母音化することで複合が標示されることがある（例 jo=n+k'uchii「門口」，sutita=n+narii「ソテツの実」cf. joo「門」，k'uchi「口」，sutitaa「ソテツ」，nari「実」）。-nchaa という長母音を末尾に持つ複数形も同様の発展をした可能性がある。

4.2　主格標識にみられる階層

上嘉鉄方言の主格標識には，以下例に示すように名詞句の有生性階層における位置に関わらず，=nu が用いられる。

（30）　un　　shigutoo　　wan=nu
　　この　仕事.主題　私=主格
　　sh-in=doo.
　　する-非過去=断定
　　「その仕事は私がするよ」

da=nu　ik-i=ten
お前=主格　行く-命令=引用
i-cha-soo!
言う-過去-感嘆
「お前が行けって言っただろ！」

an　shinsee=nu　k'a-nchaa
あの　先生=主格　子-複数
uch-oor-i.
打つ-継続-非過去
「あの先生が子供たち（を）たたいている」

akira=nu　nach-oor-i.
アキラ=主格　泣く-継続-非過去
「アキラが泣いている」

mayaa=nu　acch-aa-hoo.
猫=主格　歩く-完了-感嘆
「猫が歩いてある（=歩いたあとがある）」

turi=nu　tub-oor-i.
鳥=主格　飛ぶ-継続-非過去
「鳥が飛んでいる」

ami=nu　hwur-o-n=doo
雨=主格　降る-継続-非過去=断定
「雨が降っているよ」

nuu=nu
何=主格
kam-ar-an-su=yo?
食べる-可能-否定-名詞化=疑問詞疑問
「何が食べられないの？」

ただし，疑問代名詞 taru「誰」，diru「どれ」および指示代名詞には，=ŋa が用いられる。これらは，代名詞でかつ末尾が rV である点が共通している。

（31）an=ŋa　s-oo-tan=doo.
あれ=主格　来る-継続-過去=断定
「彼が来ていたよ」
（cf. ari「あれ」）

tan=ŋa　kagoshima=kachi
誰=主格　鹿児島=方向格
i-ja-su=yo?
行く-過去-名詞化=疑問詞疑問
「誰が鹿児島へ行ったの？」
（cf. taru「誰」）

suu=ya　un=ŋa
今日=主題　これ=主格
ukur-ar-en　chan=doo.
送る-受身-中止　来る.過去=断定
「今日はこれが送られてきたよ」
（cf. uri「これ／それ」）

din=ŋa　ukur-ar-en
どれ=主格　送る-受身-中止
cha-su=yo?
来る.過去-名詞化=疑問詞疑問
「どれが送られてきたの？」
（cf. diru「どれ」）

4.3　名詞修飾標示にみられる階層

上嘉鉄方言の名詞修飾標示には，修飾部と被修飾部が並置されるだけで修飾関係が成り立つものと，修飾部に属格助詞 =nu／=ŋa を後接するものとがある。さらに，特別な所有形を示す名詞も存在する。浦方言と同様，上嘉鉄方言の名詞修飾標示にも修飾部である名詞の単複が名詞修飾標示の分布に一部影響を与えるため，人称代名詞・再帰代名詞単数，ヒト疑問代名詞単数，ヒト指示代名詞単数，ヒト代名詞複数

(-(n)naa/-chaa)，親族呼称単数，固有名詞単数，親族呼称／固有名詞複数（-taa），親族名詞／ヒト名詞複数（-nchaa），その他の順に語例を示す。

（32）人称代名詞・再帰代名詞単数

waa　mun
私.所有　もの
「私のもの」

waa　t'ura
私.所有　顔
「私の顔」

daa　mun
お前.所有　もの
「お前のもの」

daa　hasami
お前.所有　鋏
「お前の鋏」

naa　mun
あなた.所有　もの
「あなたのもの」

naami=nu　k'uruma
あなた=属格　車
「あなたの車」

duu　t'ura
再帰.所有　顔
「自分の顔」

（33）ヒト疑問代名詞単数

taa　mun
誰.所有　もの
「誰のもの」

taa　t'ura
誰.所有　顔
「誰の顔」

（34）ヒト指示代名詞単数

an=ŋa　ajii
あれ=属格　おじいさん
「彼のおじいさん」

an=ŋa　k'uruma
あれ=属格　車
「彼の車」

（35）ヒト代名詞複数（-(n)naa/-chaa）

wa-nnaa　yaa
私-除外複数　家
「私たち（の）家」

waa-chaa　k'uruma
私-包括複数　車
「私たち（の）家」

da-nnaa　yaa
お前-複数　家
「お前たち（の）家」

naa-chaa　ajii
あなた-複数　おじいさん
「あなたたち（の）おじいさん」

ta-nnaa　mun
誰-複数　もの
「誰（誰たち）（の）もの」

a-nnaa　mun
あれ-複数　もの
「彼ら（の）もの」

(36)　親族呼称単数

wa-nnaa　ajii　k'uruma
私-除外複数　おじいさん　車
「うち（の）おじいさん（の）車」

wa-nnaa　anii　t'ura
私-除外複数　おばあさん　顔
「うち（の）おばあさん（の）顔」

wa-nnaa　boo　yaa
私-除外複数　男　家
「うち（の）息子（の）家」

wa-nnaa　mari-nkaa　mun
私-除外複数　女-指小　もの
「うち（の）幼い娘（の）もの」

(37)　固有名詞単数

takashi=nu　ajii
タカシ=属格　おじいさん
「タカシのおじいさん」

takashi=nu　yaa
タカシ=属格　家
「タカシの家」

taroo(=nu)　yaa
タロウ（=属格）　家
「タロウ（の）家」

(38)　親族呼称／固有名詞複数（-taa）

bo-nkaa-taa　k'uruma
男-指小-複数　車
「男の子たち（の）車」

shinsee-taa　k'uruma
先生-複数　車
「先生たち（の）車」

takashi-taa　yaa
タカシ-複数　家
「タカシたち（の）家」

(39)　親族名詞／ヒト名詞複数（-nchaa）

uya-nchaa　k'uruma
親-複数　車
「親たち（の）車」

uttu-nchaa　mun
弟-複数　もの
「弟たち（の）もの」

an　chu-nchaa　t'ura
あの　人-複数　顔
「あの人たち（の）顔」

(40)　その他

wa-ttari=nu　mun
私-双数=属格　もの
「私たち２人のもの」

du-cchuri=nu　mun
再帰-１人=属格　もの
「自分１人のもの」

yinŋa=ncha=nu　t'ura
男=複数=属格　顔
「男たちの顔」

uttu=nu　mun
弟=属格　もの
「弟のもの」

uya=nu　k'uruma
親=属格　車
「親の車」

an　　chu=nu　t'ura
あの　人=属格　顔
「あの人の顔」

seekusaa=nu　yaa
大工=属格　　家
「大工の家」

an　　yinŋa=ncha=nu　k'uruma
あの　男=複数=属格　　車
「あの男たちの車」

seekusa-ncha=nu　mun
大工-複数=属格　　もの
「大工たちのもの」

inŋaa=nu　duu
犬=属格　　尻尾
「犬の尻尾」

nuu=nu　hanashi
何=属格　話
「何の話」

un=ŋa　　naa
それ=属格　中
「それの中」

haku=nu　naa
箱=属格　　中
「箱の中」

以上のデータを整理すると，名詞修飾について，まずヒトを表す人称／再帰／疑問代名詞単数は特別な所有形が用いられる。ヒト指示代名詞単数は =ŋa で標示される。ヒト代名詞複数（-(n)naa/-chaa）は無標で現れる。親族呼称単数は無標，固有名詞単数は無標または =nu で現れる。親族呼称／固有名詞複数（-taa）は無標で現れる。それ以外は基本的に =nu だが，-nchaa 複数形（親族名詞と chu「人」）は無標で現れる。また指示代名詞はモノを指す場合でも =ŋa で現れる[19]。以上をまとめて以下の表９に示す。

表９　上嘉鉄方言の名詞修飾標示

人称代名詞／再帰代名詞単数	特殊所有形
ヒト疑問代名詞単数	特殊所有形
ヒト指示代名詞単数	=ŋa
ヒト代名詞複数（-naa/-chaa）	無標
親族呼称単数	無標
親族呼称／固有名詞複数（-taa）	無標
親族名詞／「人」複数（-nchaa）	無標
固有名詞単数	無標 ~ =nu
モノ指示代名詞単数	=ŋa
その他	=nu

5.　小 野 津 方 言

本節では小野津方言のデータと分析について複数標識，主格標識，名詞修飾の順に示し，最後に短母音化交替について扱う。

5.1　複数標識について

小野津方言の複数標識には -(n)naa，-kya，-taa，=nkya(a) がある。浦方言同様，=nkya(a) は名詞以外に後接するため接語として扱う（以下例参照）。小野津方言の複数標識は浦方言と同様，累加複数，近似複数，曖昧・例示を表す。本項でも個々の語例における意味的な違いによらず形式の分布を分析し，曖昧・例示を意味する語形も考察に含める。

（41）　asshi=nkya　i-chu-tan=doo.
そう=曖昧　言う-継続-過去=断定
「そんなこと言っていたよ」

まずヒトを表す代名詞の語形を表10で示す[20]。（　）内は「私１人」「お前１人」のように「○○１人」を表す。代名詞には複数接辞として -(n)naa，-kya がみられる。

次に，人称代名詞以外の語例を，親族呼称，職業呼称，親族名詞，固有名詞，その他（ヒト名詞／有生名詞／モノ代名詞／無生名詞）の順に示す。

（42）親族呼称
aji-taa
「おじいさんたち」
anma-taa ～ anmaa=nkya(a)
「おばあさん」
yakkï-taa
「おじさんたち」
boo-taa
「男たち」
bo-nkwa-taa
「男の子たち」（-nkwa は指小辞）
uttuu+boo-taa
「弟たち」
mai-taa
「女たち」

（43）職業呼称
shinsee+ninjuu ～ shinsee+ninzuu
（～ shinsee-taa ～ shinsee=nkyaa）
「先生たち」

（44）親族名詞
uya=nkya(a)
「親たち」

uttuu-=nkya(a)
「下のきょうだいたち」

（45）固有名詞
takashi-taa
「タカシたち」
t'aro-taa
「タロウたち」
t'aroo=nkya(a)
「タロウたち」

（46）その他
yinŋa=nkya
「男たち」

表10　小野津方言のヒトを表す代名詞

分類＼数		単数	複数（２人以上）	
			双数	複数（３人以上）
人称代名詞	１人称（除外）	wan（wa-cchui）	wa-nnaa	
	１人称（包括）		wa-ttai / wa-ttatooru（敬称）	waa-kya
	２人称（非敬称）	daa（da-cchui）	da-ttai	da-nnaa
	２人称（敬称）	naami ~ naame（na-cchutooru）	na-ttatooru	naa-kya
指示代名詞		ari / huri	a(ri)-nnaa / hu(ri)-nnaa	
再帰代名詞		duu（du-cchui）	duu-naa	
疑問代名詞（誰）		taru	ta(ru)-nnaa	

mëërabï=nkya(a)
「若い女たち」
seekusa=nkya(a)
「大工たち」
an chu-n-kya(a)
「あの人たち」
inŋaa=nkya(a)
「犬なんか」
ari=nkya(a)
「あれなんか」
see=nkya(a)
「酒なんか」

小野津方言の複数標識を大まかにまとめると代名詞は -(n)naa，-kya が，呼称は -taa（または =nkya(a)）が，それ以外には =nkyaa が用いられる。なお，shinsee「先生」の複数を表すのには ninjuu (～ ninzuu)「人々（敬称)」との複合語が用いられる。以上を表11にまとめて示す。

表11　小野津方言の複数標識

人称代名詞／再帰代名詞	-(n)naa（/-kya）
ヒト疑問代名詞	-naa
ヒト指示代名詞	-naa
親族呼称	-taa / =nkya(a)
職業呼称	+ninjuu ~ +ninzuu (~ -taa ~ =nkya(a))
親族名詞	=nkya(a)
固有名	-taa / =nkya(a)
その他	=nkya(a)

5.2　主格標識にみられる階層

小野津方言の主格標識は，名詞句の有生性階層に関わらず基本的に全て =ŋa で標示される[21)]。以下，文例を示す。

(47)　wa=ŋa　　ik-yui.
私=主格　行く-非過去
「私が行く」

amï=ŋa　　hwu-tu-i.
雨=主格　降る-継続-非過去
「雨が降っている」

5.3　名詞修飾標示にみられる階層

小野津方言の名詞修飾標示には，名詞を並置するだけで修飾関係が成立するもの，特殊な所有形で標示されるもの，属格 =ŋa／=nu で標示されるものがある。以下，人称代名詞／再帰代名詞単数，ヒト代名詞複数（-kya)，ヒト疑問代名詞単数，ヒト指示代名詞単数，ヒト代名詞複数（-(n)naa)，親族呼称単数，固有名詞単数，親族呼称／固有名詞複数（-taa)，それ以外の順に語例を示す。

(48)　人称代名詞／再帰代名詞単数
waa　　mun
私.所有　もの
「私のもの」

waa　　gusanï
私.所有　杖
「私の杖」

daa　　mun
お前.所有　もの
「お前のもの」

daa　　mïï
お前.所有　目
「お前の目」

duu(=nu) tsura
再帰.所有（/=属格） 顔
「自分の顔」

naami/naame=n(u) tii
あなた=属格 手
「あなたの手」

(49) ヒト代名詞複数形（-kya）
waa-kya=n(u) shima
私-複数=属格 集落
「私たちの集落」

naa-kya=n(u) yaa
あなた-複数=属格 家
「あなたたちの家」

(50) ヒト疑問代名詞単数
taa mun
誰.所有 もの
「誰のもの」

taa yaa
誰.所有 家
「誰の家」

(51) ヒト指示代名詞単数
an=ŋa hwatee
あれ=属格 畑
「あれの畑」

an=ŋa naa
あれ=属格 名前
「あれの名前」

(52) ヒト代名詞複数形（-(n)naa）
wa=nnaa yaa
私-複数 家
「私たち（の）家」

wa-ttai=nu hwanashi
私-包括複数=属格 話
「私たち 2 人の話」

a(ri)-nnaa k'uruma
あれ-除外複数 車
「彼ら（の）車」

duu-naa k'uruma
再帰-複数 車
「自分の車」

ta(ru)-nnaa k'uruma
誰-複数 車
「誰たち（の）車」

(53) 親族呼称単数
ajii k'uruma
おじいさん 車
「おじいさん（の）車」

anmaa tsura
おばあさん 顔
「おばあさん（の）顔」

yakkïï k'uruma
おじさん 車
「おじいさん（の）車」

(54) 固有名詞単数
t'aroo yaa
タロウ 家
「タロウ（の）家」

takashi=n(u)　yaa
タカシ=属格　家
「タカシの家」

takashii　yaa
タカシ.所有　家
「タカシの家」

(55)　親族呼称／固有名詞複数（-taa）

aji-taa　k'uruma
おじいさん-複数　車
「おじいさんたち（の）車」

anma-taa　tsura
おばあさん-複数　顔
「おばあさんたち（の）顔」

takashi-taa　yaa
タカシ-複数　家
「タカシたち（の）家」

(56)　それ以外

aji=nkya=nu　k'uruma
おじいさん=複数=属格　車
「おじいさんたちの車」

anma=nkya=nu　tsura
おばあさん=複数=属格　顔
「おばあさんたちの顔」

uya=nkya=nu　tsura
親=複数=属格　顔
「親たちの顔」

uya=nu　tsura
親=属格　顔
「親の顔」

uttuu=nu　tsura
弟=属格　顔
「弟の顔」

uttuu=nkya(a)=nu　k'in
弟=複数=属格　着物
「弟たちの着物」

an　chu=nu　k'uruma
あの　人=属格　車
「あの人の車」

an　chu=nkya(a)=nu　k'uruma
あの　人=複数=属格　車
「あの人たちの車」

an　yinŋa=nu　k'uruma
あの　男=属格　車
「あの男の車」

an　yinŋa=nkya(a)=nu　k'uruma
あの　男=複数=属格　車
「あの男たちの車」

seekusaa=nu　k'uruma
大工=属格　車
「大工の車」

seekusaa=nkya(a)=nu　kui
大工=複数=属格　声
「大工たちの声」

inŋaa=nu　juu
犬=属格　尻尾
「犬の尻尾」

hun=ŋa　　naa
これ=属格　中
「これの中」

nuu=nu　hwanashi
何=属格　話
「何の話」

以上のデータから，まず，ヒトを表す人称／再帰／疑問代名詞単数は特別な所有形を持つ。ただし，上嘉鉄と異なり２人称敬称は所有形がなく，=nu で標示される。ヒト指示代名詞の単数は =ŋa で標示される[22]。ヒト代名詞の複数形のうち，-(n)naa 複数形は無標で，-kya 複数形は =nu で標示される。親族呼称は無標で現れる。職業呼称は =nu で標示される。固有名詞は長母音終わりの場合は無標で現れ，長母音以外の場合は長母音化または =nu で標示される。固有名詞の複数形 -taa は無標で現れる。それ以外は基本的に =nu だが，指示代名詞はモノを指す場合でも =ŋa で現れる。以上を表12にまとめる。なお，名詞修飾の無標の分布については，単数と複数をまとめて考えると，「名詞句階層において呼称と同等かそれよりも上位に位置し，かつ長母音終わりである」場合に現れうる，とする一般化も可能である（例（52）（53）（54）参照）。

表12　小野津の名詞修飾標示

人称代名詞／再帰代名詞単数	特殊所有形
ヒト疑問代名詞単数	特殊所有形
ヒト指示代名詞単数	=ŋa
ヒト代名詞複数（-(n)naa）	無標
親族呼称単数	無標
親族呼称／固有名詞複数形（-taa）	無標
人称代名詞複数（-kya）	=nu
固有名詞単数	=nu（／長母音化）
モノ指示代名詞（単数）	=ŋa
その他	=nu

5.4　短母音化

代名詞，親族呼称，固有名詞のうち長母音末尾のものは，後接要素によって短母音化がみられる[23]。１音節長母音の場合は，１拍助詞が後接する時に短母音化するが，複数接辞及び２拍助詞が後接する場合，単独の場合は，短母音化が起こらない。

（57）　短母音化適用例（１音節）
da=ŋa
「おまえが」
ne=ŋa
「おねえさんが」
bo=ŋa
「男が」

（58）　短母音化不適用例（１音節）
daa=kara
「お前から」
nee-taa
「おねえさんたち」
boo-taa
「男たち」
nee=kara
「おねえさんから」
boo=kara
「男から」
daa
「お前」
nee
「おねえさん」
boo
「男」

２音節以上の場合は１拍助詞，複数接辞とも

に短母音化する。２拍助詞及び単独の場合は，短母音化しない。

（59）　短母音化適用例（２音節以上）

aji=ŋa
「おじいさんが」
oto=ŋa
「お父さんが」
mai=ŋa
「女が」
t'aro=ŋa
「太郎が」
yakkï=ŋa
「おじさんが」
okka=ŋa
「お母さんが」
anma=ŋa
「おばあさんが」
wa-nna=ŋa
「私たちが」
da-nna=ŋa
「お前たちが」
aji-ta=ŋa
「おじいさんたちが」
okka-ta=ŋa
「おかあさんたちが」
aji-taa
「おじいさんたち」
oto-taa
「お父さんたち」
mai-taa
「女たち」
t'aro-taa
「太郎たち」
yakki-taa
「おじさんたち」
okka-taa
「お母さんたち」
anma-taa
「おばあさんたち」
wa-nna-taa
「私たち」

（60）　短母音化不適用例（２音節以上）

ajii=kara
「おじいさんから」
otoo=kara
「お父さんから」
maii=kara
「娘から」
t'aroo=kara
「太郎から」
yakkïï=kara
「おじさんから」
okkaa=kara
「お母さんから」
anmaa=kara
「おばあさんから」
wa-nnaa=kara
「私たちから」
ajii
「おじいさん」
otoo
「お父さん」
maii
「女」
t'aroo
「太郎」
yakkïï
「おじさん」
okkaa
「お母さん」
anmaa
「おばあさん」
wa-nnaa
「私たち」

以上の短母音化は，代名詞と呼称名詞（親族呼称／固有名詞）のみに起こり，親族名詞その他には起こらない（以下例参照）。このため，名詞句階層の上位に制限された交替現象と分析できる。

（61）　短母音化不適用例（階層下位）

uttuu=ŋa
「下のきょうだいが」
uyahwaa=ŋa
「祖父母が」
kyoodee=ŋa
「きょうだいが」
seekusaa=ŋa
「大工が」
garasaa=ŋa
「カラスが」
yuuwëë=ŋa
「お祝いが」

6.　まとめと課題―浦方言／小野津方言／上嘉鉄方言の有生性階層の通言語的特徴

以上から，浦方言／上嘉鉄方言／小野津方言の名詞句の有生性階層は概ね表13のようにまとめられる。

今回扱った複数標示，主格標示，名詞修飾標示は基本的に階層に従うが，無生名詞の中でも代名詞は普通名詞と異なる振る舞いを示すことがある。琉球語の他地域の先行研究で指摘されていたように，呼称となるか否かが名詞句のふるまいを左右する点が，上で提示した通言語的な階層と対照した場合の特徴といえる。また，複数名詞が単数名詞よりも上位の階層に準じた振る舞いを示す現象がみられた。

今後の課題として，この２点の特徴の通言語的な分析がある。また名詞修飾について本稿では修飾部が一つの名詞句からなる場合のみ扱い，「X と Y の Z」のように複数の名詞句からなる場合は扱わなかった。特に X と Y が名詞句の

表13　浦方言／上嘉鉄方言／小野津方言の名詞句の有生性階層

<table>
<tr><th colspan="2">方言</th><th colspan="4">浦</th><th colspan="3">上嘉鉄</th><th colspan="4">小野津</th></tr>
<tr><th colspan="2">標示／分類</th><th>複数</th><th>主格</th><th colspan="2">修飾部</th><th>複数</th><th colspan="2">修飾部</th><th>複数</th><th colspan="2">修飾部</th><th>短母音化</th></tr>
<tr><th></th><th></th><th></th><th></th><th>単数</th><th>複数</th><th></th><th>単数</th><th>複数</th><th></th><th>単数</th><th>複数</th><th></th></tr>
<tr><td rowspan="3">代名詞</td><td>人称</td><td>-kya</td><td rowspan="6">=ga
(/=ka)</td><td>無標</td><td rowspan="6">無標</td><td>-nnaa/
-chaa</td><td rowspan="2">特殊形</td><td rowspan="7">無標</td><td>-nnaa/
-kya</td><td rowspan="2">特殊形
(/=nu)</td><td rowspan="6">無標</td><td rowspan="6">適用</td></tr>
<tr><td>疑問</td><td rowspan="4">-ta</td><td>=ka</td><td>-naa</td><td rowspan="2">-nnaa</td></tr>
<tr><td>指示</td><td>=ŋa</td><td>=ŋa</td></tr>
<tr><td rowspan="2">呼称名詞</td><td>親族</td><td rowspan="5">=nu
(/=ka)</td><td>-taa</td><td>無標</td><td>-taa
~=nkya(a)</td><td>無標</td></tr>
<tr><td>固有</td><td rowspan="4">=nu
(/=ŋa)</td><td rowspan="4">=nu
(/=ŋa)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ヒト名詞</td><td>親族</td><td rowspan="4">=nkya</td><td rowspan="4">=nu
(/=ka)</td><td rowspan="4">=nu</td><td>-nchaa</td><td rowspan="3">=nu</td><td rowspan="3">=nkya(a)</td><td rowspan="3">=nu</td><td rowspan="3">不適用</td></tr>
<tr><td>ヒト</td><td rowspan="2">=ncha</td></tr>
<tr><td rowspan="2">その他</td><td>有生</td></tr>
<tr><td>無生</td></tr>
</table>

有生性階層上で異なる位置を占める場合，X と Y のどちらに準じた振る舞いを示すか，調査と分析が課題である。

注

1）琉球語内でも地域変種間で相互理解性を欠くことから，奄美語，沖縄語，宮古語，八重山語，与那国語の５言語（またはこれに国頭語を加えた６言語）に分類する立場が一般的である。ただし，北琉球内（奄美語，沖縄語）の下位分類は諸説あるため，本稿では便宜上，琉球語の下位区分は「○○方言」とよぶ。

2）浦方言のデータは浦出身の80代男性１名，80代女性２名，60代男性１名，50代男性１名，上嘉鉄方言のデータは上嘉鉄出身の90代女性１名，80代男性１名・女性１名，小野津方言のデータは小野津出身の80代女性２名，70代女性１名を調査協力者とする聞き取り調査から得られたものである。調査にあたって，以下の助成を受けている。JSPS 科研費24242014「消滅危機言語としての琉球語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」，JSPS 科研費24720180「琉球語奄美方言文法記述のための基礎研究」，JSPS 科研費15K16754「与路島・請島を中心とした奄美大島方言の記述的研究」，JSPS 科研費12J06463「喜界島方言を中心とする琉球語の記述的・歴史的研究」，JSPS 科研費15J02695「北琉球諸語の文法記述・ドキュメンテーション及び歴史的研究」。なお，本稿中のデータ表記については，浦方言は重野（2015），上嘉鉄方言および小野津方言は小川（編）（2015）のアルファベット表記に従って示し，適宜接辞境界を加えている（接語境界は「=」，接辞境界は「-」，複合語境界は「+」で示す）。形態素境界を示さずに，同時に成り立つ二つ以上の意味機能を示すときは「.」を用いる。

3）国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏（フランス国立科学研究所）が作成した地図を適宜加筆・編集して用いている。

4）鹿児島県大島郡龍郷町役場調べ。

5）鹿児島県大島郡喜界町役場調べ。

6）琉球方言学の立場から助詞＜ガ＞＜ヌ＞（本稿の =ga/=ŋa と =nu にそれぞれ対応）の主格／連体用法の分布を論じた内間（2008）では，「ウチ・ソト意識」と呼ばれる区別に基づき，＜ガ＞は「主体が身近にとらえた対象＝ウチなるものとしてとらえた対象」に用い，＜ヌ＞は「主体が客観的にとらえた対象＝ソトなるものとしてとらえた対象」に用いると述べている。通言語学的な名詞句階層についても，動作主になりやすいかどうかではなく，話し手にとって重要であるかどうかが基準になっているとする見方があり（角田 2009），これは琉球方言学の「ウチ・ソト意識」の考え方と類似していると言える。本稿では通言語的に認められている名詞句の有標性階層のほうを指針として分析する。

7）Pellard（2010: 133）図２及び Shimoji（2011: 90）図２に基づく。ただし，Pellard では名詞句に対応する代名詞及び存在動詞の分布についても示しているがこれは割愛する。

8）新永（2014: 189）表44より抜粋。ただし，目的語標示，存在動詞の分布については割愛している。なお，並置（無標）は修飾部が名詞句に前置され，助詞などの標示を伴わずに修飾することを表す（例：katsumi yaa「カツミ（の）家」Niinaga 2014: 203（6-107b））。

9）３人称代名詞は指示代名詞がその機能を兼ねる。指示代名詞の kurï，urï，arï の機能は概ね日本語の近称「これ」，中称「それ」，遠称「あれ」にあたるが，詳細は別稿に譲る。双数形は人称代名詞語幹に t'ari「２人」が融合した形式である。

10）=nkya が長母音を末尾に持つ語幹に後接すると，語幹末が短母音化する。

11）=nkya が n を末尾に持つ語幹に後接すると，n が一つ削除されるか，nu が挿入される。

12）ただし，複数標識の -ta と =nkya のどちらが後接するかで累加複数，近似複数を表し分けていると考えられる例は見当たらない。そのため，複数標識の違いが意味の違いに反映されるとは考えない。

13）下地（2015: 400）にも浦方言の非動詞述語文は焦点化されていない場合は名詞句階層に従って =ga/=nu の交替がおこるが，焦点化されると名詞句階層に従わずに =ga に固定されるとの指摘がある。

14）代名詞以外では，末尾音が rV であっても他の名詞と同様に階層に応じて =ga/=nu が現れる（例：hikaru=ga ヒカル=主格，tottsïburu=nu カボチャ=主格）ため，=ka の分布の条件として音韻的条件だけでなく代名詞であることが必要であると考える。

15）dïru「どれ」に =ka がついて名詞修飾する例は確認されていないため，前述の主格標示の場合と異なり，音韻的条件でなく代名詞の下位区分で一般化している。

16）本稿は Shirata et al.（2011）で示した分布にさらにデータを加えて分析している。

17）３人称代名詞は指示代名詞がその機能を兼ねる。指示代名詞の hwuri，uri，ari の機能は概ねそれぞれ日本語の近称「これ」，近称と中称「これ，それ」，遠称「あれ」にあたるが，詳細は別稿に譲る。双数形は人称代名詞語幹に t'ari「２人」または t'atooru「お２人様」が融合した形式である。

18）喜界島方言の親族呼称は，日本語のように目上を指すもの（田窪 1992・1997，鈴木 1973）に加え，同輩または目下を指すものとして，boo（男）と ma(r)ii（女）がある。なお，喜界島方言の親族語彙の先行研究としては木部（2015）がある。

19）diru「どれ」に =ŋa がついて名詞修飾する例は確認されていないため，前述の主格標示の場合と異なり，音韻的条件でなく代名詞の下位区分で一般化している。

20）３人称代名詞は指示代名詞がその機能を兼ねる。

指示代名詞の huri，ari の機能は概ねそれぞれ日本語の近称と中称「これ，それ」，遠称「あれ」にあたるが，詳細は別稿に譲る。双数形は人称代名詞語幹に t'ai「２人」または t'atooru「お２人様」が融合した形式である。-(n)naa を末尾に持つ形式は，さらに -taa が後接した形式も許容されるが（例：wa-nna-taa「私たち」，da-nna-taa「お前たち」，a(ri)-nna-taa「彼ら」，ta(ru)-nna-taa「誰たち」），議論の簡便のため割愛する。

21）ただし，形容詞述語で接辞 -sa を末尾にもつ形式を用いた場合，=nu が用いられることがある（例：haji=ŋa/=nu chu-sa=yaa「風が強いなあ」）。この =nu の分布が名詞句階層にも左右されるかは未調査である。

22）指示代名詞の属格形は，語幹末が縮約する（例：an=ŋa「あれ／彼の」）。一方主格形は語幹末が縮約しない（例：ari=ŋa「あれ／彼が」）。これは rV を語幹にもつその他の代名詞も同様である（例：taru=ŋa「誰が」，juri=ŋa「どれが」）。なお，浦方言・上嘉鉄方言では主格形でも縮約が起こる（例：ak=ka「あれ（／彼）が（／の）」，tak=ka「誰が／の」，dík=ka「どれが」（以上浦方言），an=ŋa「あれ（／彼）が（／の）」，tan=ŋa「誰が」，din=ŋa「どれが」（以上上嘉鉄方言））。

23）なお，アクセント上は長母音で終わる場合（単独及び -taa 複数形，２拍助詞後接形）は上野（2001）の α 型，１拍助詞がついた場合は β 型になる。

参　考　文　献

Corbett, Greville G. 2000. *Number.* Cambridge: Cambridge University Press.

Pellard, Thomas. 2010. Ōgami（Miyakko Ryukyuan）. In Shimoji, Michinori, and Thomas Pellard,（eds.）, *An Introduction to Ryukyuan Languages*, 113–166. Tokyo: ILCAA.

Shirata, Rihito, Masahiro Yamada, Chisako Ogino and Yukinori Takubo. 2011. *Common Nouns as Proper Names in Kamikatetsu-Kikai Ryukyuan.* Poster presented at *The 21st Japanese/Korean Linguistics Conference,* Oct 20–22. Seoul: Seoul National University.

Shimoji, Michinori. 2011. Irabu Ryukyuan. In Yamakoshi, Yasuhiro,（ed.）, *Grammatical sketches from the field*, 77–131. Tokyo: ILCAA.

Silverstein, Michael. 1976. Hierarchy of Features and Ergativity. In Dixon, R. M. W.（ed.）, *Grammatical Categories in Australian Languages,* 112–171. Canberra: Australian National University.

内間直仁（2008）「琉球方言における助詞＜が＞＜の＞の用法」『琉球大学言語文化論叢』（5），1–14.

上野善道（2001）「喜界島小野津方言のアクセント調査報告」『琉球の方言』（26），1–15.

小川晋史（編）（2015）『琉球のことばの書き方―琉球諸語統一的表記法』東京：くろしお出版.

木部暢子（2015）「共同研究プロジェクト紹介　基幹型：消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 奄美喜界島方言の親族語彙：お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん」『国語研プロジェクトレビュー』5，57–67.

重野裕美（2015）「浦方言」小川晋史（編集）『琉球のことばの書き方―琉球諸語統一的表記法』95–115．東京：くろしお出版.

下地理則（2015）「焦点化と格標識」『日本言語学会第151回大会予稿集』396–401.

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書.

田窪行則（1992）「言語行動と視点―人称詞を中心に」『日本語学』11(9), 20–27．東京：くろしお出版.

田窪行則（1997）「日本語の人称表現」田窪行則（編）『視点と言語行動』13–44．東京：くろしお出版.（田窪行則（2010）『日本語の構造―推論と知識管理』第三部第四章（261–288）に再録）

角田太作（2009）『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.

徳永晶子（2014）「奄美沖永良部島方言の複数接尾辞」『JLVC 2014予稿集』67–72.

新永悠人（2013）「北琉球奄美湯湾方言の複数を表す形態素と名詞句階層」『日本方言研究会第96回研究発表会発表原稿集』41–48.